第 14 回水難学会学術総会（令和６年・東京都）発表抄録

水辺のチェーンオブサバイバルの標準化を考える～2,000 人アンケートの調査結果から～（第２報）

佐竹洋二[1]
[1]埼玉県三郷市消防本部

１・背景

消防職員等は各種救命講習会の指導の際に、心肺停止傷病者の社会復帰率向上を目指し、心停止の予防・早期認識と通報・一次救命処置・２次救命処置が連鎖することにより蘇生率が上がることを市民に対し伝えており、救命講習等の資料には広くチェーンオブサバイバル（救命の連鎖）のイラストが用いられている。水の事故時におけるチェーンオブサバイバルは旧水難学会指導員養成講習会テキストにおいて第２章で解説があり背浮きによる呼吸の確保・１１９番通報・専門部隊による救助活動と医療機関へ搬送と記されている。

２・目的

水の事故時における対処方法は近年、水難学会及びその指導員が全国のみならず世界で普及活動を行い、徐々に認識されてきているが、その特殊性から一般的にはまだまだ広く認知されていない。令和元年度の第９回水難学会学術総会において「水の事故を目撃した際にあなたがとる行動順位～市民アンケートの結果から考える水辺のチェーンオブサバイバルとは」について発表し、９０人からのアンケートから市民が考える水辺のチェーンオブサバイバルの調査結果を発表したが、今回は職種によってその行動順位に変化があるか調査をすることにした。

３・方法

調査対象は、職種別で一般市民・小中学生・小中学生の保護者・学校教員・消防職員の５つの分類に分け、設問として❶ライフジャケット着用で予防❷浮くものを投げる❸１１９番通報❹周りの人を呼ぶの４項目から予防部分の❶は固定し、以下❷～❹を並び替え６パターンから最も適した行動順位を選択する方式とした。

４・結果

アンケートは約２，０００人に対して行い、パターン１の❶❷❸❹の行動順位を選択したかたが６０８人で最も多く、次いで❶❷❹❸の行動順位を選択したかたが５７１人、最も回答が少なかった❶❹❷❸を選択したかたが１２３人であった。職種分類では消防職員以外は行動順位のパターン選択に差はなかったが、消防職員は２番目に多かった行動パターンは周りの人を呼ぶことが２つ目の行動として選択するかたが多かった。

５・結論

心肺停止でのチェーンオブサバイバルは、心停止の予防から始まり２次救命処置と心拍再開後集中治療までを４つの鎖で図示化されている。当然、状況によりその順番は入れ替わることも多々あるが、一定の指標があることにより冷静な行動に繋がる一助となる。今回は職種別に行動順位に変化があるか調査を行ったが、どの職種においても６つのパターンに一定数の回答があり、言い換えれば水辺のチェーンオブサバイバルは指標がないことから指標が定められれば水難事故死の減少に繋がるのではないかと考えた。今後は水難学会により防ぎえた溺死を０にするための最も有効な行動パターンを定め、水の事故に遭遇した際の行動順位を瞬時に思い出させるために心肺停止の救命の連鎖イラストに準じた水辺のチェーンオブサバイバルを標準化する必要があると考える。